＜研究ノート＞

在特会の論理（10）
――愛国心と排外主義の間・J氏の場合――

樋口直人（徳島大学）

1. 問題の所在

日本に右翼は存在したが、（西欧のような排外主義を軸とする）極右は存在しなかった。そうした土壌にあって、2000年代後半から街頭で外国人排斥を叫ぶ極右運動が出現している。そして右翼は悲劇として、極右は茶番として登場したと付け加えられるならば、ことの学術的な扱いは簡単である。だが、ジャーナリズムや社会評論でいわれるほど現実は単純ではなく、極右運動が発生した背景は多角的に分析しなければ明らかにしえない。すなわち、西欧を中心とする極右研究、ナショナリズム・移民研究、社会運動論等の検証を経て初めて、在日特権を許さない市民の会（以下、在特会）を初めとする日本の極右運動を理解することができる。

そうした目的のため筆者は、2011年から極右運動の活動家に対して聞き取り調査を進めている。極右の活動家に対する聞き取りは、これまでほとんどなされたことがないため、二次分析に使えるよう聞き取りの記録を開示する作業を行ってきた（樋口直人「在特会の論理（1）～(7)」『徳島大学社会科学研究』25号、「在特会の論理(8)～(9)」「『行動する保守』の論理(1)～(3)」『徳島大学地域科学研究』1号、「『行動する保守』の論理（4）」『茨城大学地域総合研究所年報』45号、2012年）。本稿もその一環として位置づけられており、2011年11月18日に在特会メンバーのJ氏（40代男性）に対して行った聞き取りの記録を、録音にもとづき彼の言葉をそのまま次節以下で紹介する。そのうえで、J氏の事例が持つ理論的含意について考察したい。

2. 外国人や政治との関わり

（外国人との接触は）一応、外国語学科だったんで、その国の方との交流は結構ありましたよね。（小さい頃は）在日でしたら1人いましたね。何の違和感もなく。ちなみに彼は野球やっていて、亜細亜大学から熊谷組経由で阪神タイガースに入りましたけどね。まあ在日の方です。僕は彼のこと外国人だという意識はまったくなかったので。外国語学科に入りましたが、当然先生もあちらの国の方もいますし、留学生もいらっしゃいますし、大学出たらいわゆる外国人と接する機会は増えましたよね。（今の活動とのつながりは）まったくないですね。そういうのはまったくないです。私は決して――断っておきますが、決して排外主義ではないです。

（在特会の活動に連なる関心が生まれたきっかけは）天安門ですかね、やっぱり。相当昔の話ですね。20年以上昔の話です。あれで何か、中国という国に対してなんか嫌悪感というか、それ以来中国という国に対しての嫌悪感が拭えなくなってますね。で、その後の反日活動とか見て、この国――あと毒入りギョウザとか、北京オリンピックの時の長野の暴動事件とか――この国はちょっと信用できんなという思いがずっと20年来なってますね。世界にはこういう国があるんだということですね。正直そこまで韓国に対して嫌悪感というのは――まあ北朝鮮は別ですけどね――なかったんですけどね。どちらかというと、この運動始めていろいろ勉強していくにつれて、韓国もおかしいなと、今は感じるようになりましたね。どちらかというと僕は、中国の方から始まってます。でも韓国も竹島問題とかいろいろあるんで、まあおかしいなとは思ってたけど、そこまで――嫌悪感まではなかったですね。

（拉致問題などのきっかけは）拉致は本当に知らなかったですね。拉致は本当に、本格的にインターネットで情報を得るようになるまでは。

あったんだろうなと思ってましたものね。(2002年の小泉訪朝の時には）そこまでなかったですね、関心は。正直。あの頃どちらかというと僕、サッカーのほうに熱中していて。あの頃はそこまで社会問題に関心なかった時期なんですよ、自分の中で。もう日韓ワールドカップに熱中していてですね。拉致――もちろん拉致被害者の方が帰ってこられたのはそれは嬉しかったですけど――そこまで深くは考えていなかったですね、あの頃は。

（ワールドカップの時に韓国が嫌いになった人がいますが）そこまではなかったですね。羨ましいと思いましたね。勝ち上がったことに羨ましいと思ったけど。でも後でよくよく考えてみると、ずるいなとやっぱり、これは何かおかしいなとは後で思いましたよね。明らかな反則とか、あと誤審があったので。やっぱり何かおかしい、これおかしいなというのは、後になって思いましたよね。まあ、そこまで深くも考えてなかったですけど。（それらは）きっかけとはいえないですね。

むしろあの、韓流ドラマの気持ち悪さ、日韓ワールドカップが終わってから韓流ドラマが始まったじゃないですか。冬のソナタですかね、ちょうどその時期じゃないですか。ちょっと気持ち悪いなというのはありましたよね。気持ち悪いというか、「何でこんなものにみんな熱中するんやろう」とか。「何が面白いんだろう」とか。「それはないだろう」みたいな（ストーリー）。で、竹島問題もクローズアップされてきましたしね。でも、韓国に関してはやっぱりこの運動始めて勉強するようになってからですかね。

（政治に対しては）結構社会科とか好きだったし、子どもの頃からニュースとか見るの好きでしたからね。（政治に対する）関心はある方だったと思います。（選挙には）行ってますね。必ずとはいえない、行かなかったこともありますけど、少なくも30（歳）過ぎてからは必ず行ってますね。（理由は）どうしてといわれても困りますけども、まあやっぱり与えられた権利ですからね、当然行使しないといけないと思うし。ただ、やっぱり空しさを感じたんですよね。小泉郵政選挙とか、この前の2009年の民主党選挙とかで、何でこうマスコミの言うことを聞いて投票したらこういう世の中になっていくんだろう。投票に行きながらもそういう矛盾を感じてましたね、ずっと。

（支持政党は）特にはないですね。特に自民党が好きってわけでもないし、社会党が好きだったわけでもなく。何かその時の是々非々でしたよね。（投票先は）自民党でしょうか、やっぱり。（2007年参院選の時にも自民党に）あのときもそうですね。やっぱり民主党はちょっと信用できないなと。本当、消極的な理由ですけどね。民主党もですね、やっぱり一見自民党、旧自民党の人が多いけど、やっぱり旧社会党の人間も多いじゃないですか。支持母体がどうしても、日教組とか自治労とか、どうしても左翼側じゃないですか。これはちょっと危ないなと。ちょっと信用できないな、というのがありますよね。

やっぱ反共ってのがあるんですよ。共産党、共産主義が嫌いとか、社会主義が嫌いとか、やっぱりあるんで。どうしても社会党とか共産党に入れるのは抵抗があるんで。かといって公明党は「うーん」という感じなんで。どうなんですかね、消極的な理由でやっぱりどうしても自民を選んでしまうという感じでしょうかね。

（天安門事件との関係）それもあるかも知れませんね。天安門･･･あるでしょうね、やっぱりそれは。あとソ連も嫌いでしたからね。何か共産主義イコール独裁主義とか何か、そういう暗いイメージがあって、どうしてもそういう国とかそういうなにか、イデオロギーを好きになれなかったんですよ。だから、積極的に自民党が好きとかいうわけじゃなくて、何ていうの、マイナスを選んでたら結局まあ自民にならざるをえなかった。――いや、決して自民党好きじゃないですよ。不満は一杯ありますよ。今でも。

（93年に自民党政権が）いったん崩壊しましたよね。あの時は、どこに入れたんだっけ。もしかしたらどこに入れたか覚えていないですけど、もしかして日本新党かどっかに入れたかもしれないですね。ちょっとそこは記憶が定かじゃないんですけど。やっぱり自民党政権に不満があったのも、それは事実。かといって社会党や共産党はイデオロギー的に嫌だと。もしかしてその、あったかもしれないですね。どこに入れたかもう定かじゃないんで。なにせもう20年近く前ですからね。もしかしたら自民党以外

に入れたかもしれないですね。

3. 運動に至る経緯

(1)尖閣というきっかけ

ネット（で情報を集め始めたの）は･･･やっぱり尖閣事件くらいからですね。それまではテレビで情報を得ていた方なんで。･･･尖閣よりもうちょっと前かな。もうちょっと前から、きっかけはわからないけど何か、自分の中でこう愛国心が湧くことがあったんですよ。テレビドラマかなんだったかな･･･特攻隊か何かの。まあ、特攻隊が大きいですかね、あと。特攻のドラマか映画みて。こんな立派な人たちがそんな悪いことしたはずがない。それで、そうですね、そういったことを調べるようになりましたね。

この運動を始めるきっかけは、やっぱり疑問を――2009年から民主党政権になって疑問をずっと感じたんですけど、決定的な出来事は尖閣ですよね。中国がああいうことをする国だというのはわかっていたけど、中国の行為よりも日本の政府の対応の方に怒ってたんですよ。その前は竹島もそうですよね。何でこの国は自分の領土を守ることができないんだろうって。竹島にせよ尖閣にしろ――今、対馬も狙われてますよね――何でこう、外国に対して毅然とした態度が取れないんだろう。それをずっと疑問に思ってましたね。

（中国については）ああやっぱこいつら嫌な奴だなあと。反中感情はもうこの20年ずっと持ち続けてますね。まあその、比較的ない時もありますけどね。いつも、毎日そればっかり思っているわけじゃないですから。何かことあるごとに反中というのはずっと思ってましたよ。さっき申し上げたように、尖閣はどちらかというと、やった中国よりも日本の対応がおかしいだろう、みたいな。これは絶対裏でつながってるぞ。これはこのままだったらやばいなと、竹島もやばい、対馬もやばいぞと。やっぱり自分の中で危機感ですか――を持つようになりましたよね。

その頃から、まあテレビニュースに疑問を持ち始めて、きっかけはよく覚えてないんですけど、インターネットで情報を調べるようになっていったんですよ。たとえばチャンネル桜であるとか。まあ、あるいはいろいろな動画とかですかね。在特会さんの動画を見たし、日護会さんの動画を見たし。「ああ、こういう考えってあるんだな」って。「ああ、従軍慰安婦問題、ウソだったんだ」、そういうの教えてくれないじゃないですか。そういうテレビじゃ、学校じゃ教えてくれないことをいろいろインターネットで知るようになって。

(2)講演会からリアルな活動へ

うーん、直接在特会に入るきっかけはなんだろう。My日本というSNSがあるんですよね。それで今から半年前ですが、青山繁晴さんの講演会がありまして、そこで終わったらMy日本のメンバーだけで食事会をしようという話になって、それに行ってみたところで、そこで今一緒に活動している在特会さんで活動している方が何人かいらっしゃって。まあそこでの出会いがきっかけでしたね。そこで出会って、在特会というのは桜井誠さんというのは知ってましたけど、まさか自分が活動するとは思ってなかったんで。

その2、3週間前、田母神さんの――田母神さん（の講演会に参加したの）が初めてですね。（足を運んだのは）田母神さんの講演会が今年の2月くらいですからね、多分それが初めてですね。田母神がやっぱりこう、自分が目覚めるきっかけだったんですよ。2008年でしたか、日本は侵略国家ではなかった――「ああこういう考えの人もいるんだ」って。かなりマスコミから叩かれたじゃないですか。それからも自分の信念一切曲げないで、自分から辞表を出さなかったし。書くのを拒否して。こういう考えの人がいるんだって、田母神さんが大きかったですよね。（知ったのは）一般的なニュースですけどね。テレビニュースです。で、やっぱりあの何ていうか、ユーモアに魅かれたのですよね、彼の。こんなユーモアのある人がそんな悪い人じゃないと思って。で、まあ論文なんかもちょっと読んでみて。そうですね、やっぱり田母神さんは大きかったですね。この人の話なら聞いてみようと思って。

（講演会を知ったのは）My日本経由ですね。もっと詳しくいうと、My日本もチャンネル桜経由だったんですけど。My日本の生放送をチャ

ンネル桜の枠で借りてた番組があって、「ああ、こういうSNSサイトがあるんだ」って。それでMy日本にアクセスするようになって、青山さんの講演会があるということで行ってみて、そこでたまたま在特会のメンバーの方と知り合う機会になって、「ああ、こんど街宣やるから一度来てみない？」みたいな。それが今年の6月ですかね。桜井さんの演説に魅かれてたのもありますし、講演に行って出会った人たちが、すごい穏やかな人たちだったんですよ。「ああこんな人たちなんだ」って。それは大きかったですよね。

何かこう、一応それまでもツイッターや何かで拡散して、いろいろ情報拡散とかはしてたんですよ。自分で情報発信したりとか。勝手にやってただけですけどね。ただやっぱこう、リアルに人に伝えたい、何かそういう欲求があったんでしょうね、自分の中で。自分の言葉で伝えたいというのがあったんでしょうね。生の声で。ネットじゃなくて。そういう欲求が多分、多分自分の中にあったんでしょうね。（人前に立つことの抵抗は）それはないですね。もうかなり動画が上がってますからね。たとえば知り合いにばれるとか——いや、ばれて困るような知り合いもいませんしね。特に何か身内に組合員がいるとか、労組がいるとかそういうのはないですし。まあ別に抵抗はなかったですね。

4. 活動の実際

（社会運動への参加は）まったく初めてです。社会運動というかどうかはわかりませんけど、初めてですね。社会運動といったら何か、共産主義とか社会主義という感じ。チャンネル桜の水島さんとか国民運動といいますけどね。市民運動･･･まあ市民の会だから市民運動なのかな。

（実際に参加して）いいですね。あの、居心地がいいというか、自分と同じイデオロギーの人たちといるというのは、居心地がいいんです、すごい。居心地がいいし、刺激になりますものね。自分にない知識を持っている方がいっぱいいらっしゃるんで。すごい刺激になります。ストレスが溜まるんですよね、こういう話をしたくてもまったく関心がない人に話をしたって、馬の耳になんとかじゃないですか。まあでもそういう人たちに伝えていかないといけないんですけどね、本当は。

（それまで政治関連のトピックについて話をする人は）いないですね。いなかったですね。話しても無駄だから話さなかったというか。それはちょっと違うだろうみたいな。こういう話ってしにくいじゃないですか、イデオロギーの話ってやっぱり。政治とプロ野球の話は気をつけろっていうじゃないですか。野球の好きなチームの話は気をつけろというじゃないですか、何か話しにくいというのはありますよね、そういう。

どちらかというとみんなテレビのいうことを鵜呑みにして、自民党がだめだから民主党だと。戦時中日本は韓国に悪いことしたんだから賠償しなきゃいけないとか、そういう人が多かったですよね。あとお花畑な、「日本が武器を捨てたら世界が平和になる」というお花畑な人とか、そういう人ばっかりですからね。初めて自分とこう、イデオロギーで合致できる人たちと出会えたというのは大きかったですね。もちろん、（在特会の）皆さん先輩ですから知識もすごいあるし。話をしてもすごい勉強になったんですよね。自分ももっともっと勉強しないといけないなと思いましたよね。

ほぼ毎回参加してますね。好きなんですよね、行くのが。やっぱ演説するのが好きなんでしょ、多分。2回目の街宣でもうマイク握ってましたから。まあ一応、自分なりにチャンネル桜とか、桜井さんや日護の黒田さんの動画見て自分なりに研究してたんで。

多いときは（月に）2、3回というときもありますよね。まあ、別に彼女もいるわけじゃないし、家庭があるわけでもなし、（時間的な制約は）思ったことはないですね。もし本当に大事なことがあれば、「ごめんなさい、今回は」といいますから。別にそれでとやかく言われることもないですし、一応在特会は自分の仕事やプライベートを優先して、自分でできる範囲で参加してくださいというのがポリシーですから。それでストレスを感じることはないですね。

（参加して）仲間を得られたのが一番大きかったですね。同志か。あとやっぱり、本当にリアルで活動する大切さを教えられたというか、「ああこんながんばっている人たちがいるんだ」と

思って。やっぱ尊敬しますよ、（同席していた）彼女だって。すごいですからね。がんばり屋さんなんですよ、彼女もね。がんばり屋さんで演説なんかもすごくうまいし。で、気もすごくよく利いて。すごく気遣いのできる方なんですよ。演説は結構どぎついんですけど。すごい良い方ばっかりと出会えたなと思って。それが大きいですよね、やっぱり。良い方々と出会えて、リアルな活動の大切さを思い知らせてくれたというか。

（リアルな活動の意味）やっぱりわからないじゃないですか、ネットでは。実際に街に出てチラシを配ったりとか、演説をしたりだとかして、リアルで反応を見てみないとわからないじゃないですか。「ああやっぱり関心ねえんだな」とか。「ああ今日はこんなにビラ受け取ってくれた」とか。「ああ読んでくれた」とかですね。何かそういうのを感じることって、そういうことを肌で感じるってすごい大切なんだなって思って。「ああやっぱまだまだ無関心な人が多いな」と。まだまだがんばらなきゃいけないな」。そういうのは、ネットで――ツイッターで拡散するだけじゃわからないじゃないですか。「書を捨て街に出よ」ではないですけど、そういうのがリアルな活動じゃないとわからないと思うんですよね。

まあ、普通の人は引くかもしれませんね。でもそれ（街頭行動）だけじゃないですからね。実際に市役所とかに行政交渉に行ったりもしてますからね。ヘイトスピーチだけがクローズアップされますけど、それだけじゃないですからね、決して。（でも）言葉が適切かどうかはわかりませんが、（目立つ行動で）エンターテイメント性というかそういうのがないと、人集まらないと思うんですよね。どうそれを折り合いをつけていくかというところだと思うんですよ。

5. 危機感という動機

(1) 愛国心と危機感

（エネルギーのもとは）月並みですが愛国心ですかね。危機感。なんといっても、この前のTPPもそうですし、外国人参政権、人権侵害救済法――これらがもし本当に、もし可決されようものなら僕は日本終わりだと思っているんですよ。それくらいの危機感を持っているので。やっぱり国を守りたいというのがあるんですけどね。

（愛国心が生まれた契機は）サッカーとかスポーツで日本が勝つと嬉しいという、そういうのはあったし、負けて悔しいというのもありましたし。あと、ノーベル賞でもなんでも日本人が賞賛されたら嬉しいとか。逆に何か中国や韓国で反日運動があったら悔しいとか。まあ、人並みには（愛国心が）あったと思いますけどね、昔から。普通に。そこまで国旗や日の丸に、そこまでの思い入れはなかったですけどね、正直。（皇室に対する関心は）正直なかったですね。ただいろいろなことを調べて知っていくうちに、自分のアイデンティティというか、日の丸とか国旗とか国歌とか。

本当にだから、ここ2、3年ですかね。それまではどちらかというとテレビの言うことを真に受けてというか、「まあそうなんだろうな」くらいにしか思ってなかったんで。30代の終わりくらいに竹島がありましたから、「何でここまで日本はなめられるんだろうね」と、そういうのはありましたよね。どの年代（だった時）でも疑問は持っているんですよ、やっぱり。何でこう日本は外国にぺこぺこするんだろうとか。アメリカの言いなりになるんだろうとか、何でこう賠償金を払わなきゃいけんのだろうとか。そういうはずっと思ってましたけど、なかなかテレビじゃ本当のこと言わないじゃないですか。

なぜ目覚めたかと言われても･･･まあ年代は関係ないと思うんですけどね。僕の･･･はっきりとは覚えてないんですよ、どの瞬間だというのは。でも尖閣は大きな分岐点だったろうなとは思いますよね。

（外国人参政権について）そういうのはあるって聞いてましたけど、「それやばいんじゃないの」という意識しかなかったですけどね。賛成したことはないですね。強い関心を持っていたわけでもない。まして人権擁護法案は、ほとんど知識なかったですね、それまでは。（外国人参政権に対して関心が出たのは）ネットで情報をいろいろと得るようになったのと、やっぱ中国人と韓国人を、日本の地方行政とはいえ政治に関わるのは絶対いけないなという思いがあって。だからやっぱり2、3年前からネットでいろ

いろと情報を調べるようになってからですかね、本格的に。何となく嫌でしたけどね、外国人参政権は――（ネットで調べてから）強く思うようになりましたね。

でも、人権擁護法案は正直わからなかったですけどね。何か名前が良さそうじゃないですか。「ああどうなんだろう」と思っていたら、自分でいろいろ調べてみたら、これはとんでもない、これは言論弾圧だと。（夫婦別姓に対する関心は）ほとんどなかったですね。（賛否については）反対ですよね。まあ、日本の家制度ですからね。そこまでまだ深く勉強もしていないんで。あんまり大きな声では言えないですけども、どちらかというと僕、TPPの方が関心があってですね。TPPは、日本の社会制度を根底から覆す可能性のある制度だと思ってるんですよ。国民皆保険制度とか、あるいはもしかしたら銃社会になる可能性だってあるじゃないですか。あるいは公共投資に外国の、アメリカの建築会社が入ってくるかもしれないじゃないですか。下手すれば日本の中小の建設業者がばたばた倒産することもあるし。まあ、夫婦別姓よりもどちらかというとTPPの方が関心があるんですよね、正直な話として。夫婦別姓も勉強しなきゃいけないなと思ってるんですけどね。

どちらかというと、外国人地方参政権――夫婦別姓で特にデモやったという話は聞いたことないですけどね。この前TPPではデモ、街宣やりましたけどね、私たちも。これから勉強していかなきゃいけないんでしょうね。（参加して変わったこと）変わってはないですけどね。まあ、強いてあげればますます愛国活動、護国活動に入り込んでいった、そういうのはありましたけどね。特に変わったことはないと思います。

（活動の中で一番関心のあるトピック）TPPと人権侵害（救済法）ですかね。まあ、もちろん外国人地方参政権もあるんですけど。この3点が一番自分は気になります。（人権擁護法については）もちろん反対ですから、いろいろな議員さんに反対の電話したりとか、抗議のメールしたりとか、個人的にはやってますよね。もちろん必ず街宣活動ではそういった問題に絶対触れて、通行人の方の注意を促すとかですね。そういうにはしてますね。（演説の時には）なるだけ取り入れるようにしてますね。あとパチンコ問題ですか。

(2) なぜ反中感情と在特会の活動が結びつくのか

（在特会の）専門はどちらかというと在日の、どちらかというと在日韓国・朝鮮人の方ですけどね。（なぜ反中感情が在特会の活動と結びつくのか）うーん、何ででしょう。まあ、縁でしょうね。縁があって。それでやっぱり、どうしてもそういう話をするとそういう(在日関連の）話になるじゃないですか。で、自分で調べてみてもやっぱり、自分でもネットで見てみた。「これはおかしいだろ、お前ら」みたいになりまして。

まあ、反韓国･反朝鮮の――やっぱ決定的だったのは、従軍慰安婦はウソだった、これですよね。俺なんかだまされたと。俺は20年間だまされてたのか。（当時は）信じてましたね。情報がテレビしかなかったですからね、当時は。もうテレビがいうことをそのまんま僕も思ってましたからね。ああ、俺達のおじいちゃん、ひいおじいちゃん、そんな悪いことしたんだ、じゃあ恨まれてもしょうがねえかな、と正直思ってましたものね､やっぱり。ただそれがないとわかった以上、あんな賠償金はなんだったんだと。俺達の税金を返せ、そういう感情になりましたよね。まあ、それも在特会の活動に入ってネットでいろいろ調べていくうちにです。まあ、（慰安婦問題の「真実」を）知ったか在特会か、それに気づいたほうが早かったかな。でも、こんなこと言っていいのかあれだけど、きっかけはとにかくリアルで活動したかったというのが･･･。まあ、それでたまたま在特会の方と知己になったんで、ここでちょっとお世話になってがんばってみようかなと。

（反中感情との関係）外国人地方参政権と中国って関係あるじゃないですか。まったくなくはない。人権救済法案も、地方参政権が――地方参政権を有する者というじゃないですか、人権擁護委員が。それに韓国人や中国人がなる可能性あるじゃないですか。外国人参政権が通ったら。反中国と無縁じゃない、関係ないとは思わないんですよね。

（東アジア統合は）それはいやですね。なりたくないですね。だって今EUだってヒイヒイいっているじゃないですか。やっぱり文化も違えば経済格差も違えば、絶対そんな統合なんか無理

やり統合したら、何年かしたら絶対こういう軋轢というか、出てきますものね。それは僕は反対だな。現に実際、長野で北京オリンピックの時の事件があったじゃないですか。やっぱり何も起こらないという保証はないと思うんですよ。国防動員法でしたっけ？あれが発令されたらもしかしたら中国人留学生が暴れるかもしれないですし。その可能性もゼロじゃないと思うんですよ。

6. 愛国心と排外主義の間――結語に代えて

J氏は、愛国心が現在の活動に結びついたとしている。自らを排外主義者ではないともいう。J氏ほど明示的にではないにせよ、こうした自己規定をする極右の活動家は少なくない。在特会などの極右運動をめぐる言説では、活動家がたぎらせる「憎悪」に焦点が当てられており、憎悪→そのはけ口として弱者をいじめる排外主義という立論が圧倒的に多い（e.g. 安田浩一「在特会の正体」『G2』6号、2010年、「ネット右翼に対する宣戦布告」『G2』7号、2011年）。その意味で、活動家のいう「愛国心」はレトリックに過ぎないとされ（あるいは「寄る辺なき人がすがる最後の砦としての国家」という剥奪の結果として）、分析の俎上にはのぼらない。つまり、剥奪→憎悪→標的としての弱者という説明図式が、多くの論考で用いられている。

本稿執筆時点で筆者は25名の活動家に聞き取りを行ってきたが、剥奪→憎悪というプッシュ要因は、極右運動への参加の説明として適切でないと考える。代わりに提起したいのは、活動家による「愛国運動」という自己規定を、ひとまずは「真に受ける」ことである。別稿で述べたように、不満や不安といった剥奪要因による極右運動の説明は、社会運動研究からすれば二昔前の議論でしかなく、批判に堪えるものではない（樋口直人「排外主義運動の現段階」外国人人権法連絡会編『外国人・民族的マイノリティ人権白書2012』外国人人権法連絡会、2012年）。むしろ、J氏もそうであるようにインターネットが潜在的支持層を糾合する基盤になるという動員構造（プル要因）に、まずは注目したほうがよいだろう。

すなわち、極右運動はインターネットを効果的に活用することで、「愛国心」を持つが直接行動に携わったことのない潜在的支持層をひきつけるのに成功した。こうした潜在的支持層は、2000年代後半に限らず常に一定程度存在したと考えられるが、それを組織化する動員構造が存在しなかった。街宣右翼や新右翼、あるいは日本会議のような保守系団体は、そうした層を組織化してこなかったと言い換えてもよい。それに対して動員構造を作り上げたのは、ネットに頼るほかなかった在特会などの極右運動であった。

こう考えたとき、「なぜ愛国心が排外主義と結びつくのか」という問いの解明が課題となる。活動家たちは「愛国・護国」を旗印としているが、それが単なる排外主義運動でしかないのはなぜか。あるいは、「在日特権」という根拠のない糾弾対象が活動家の「愛国心」を捉え、排外主義が愛国心の発露であると理解されるのはなぜか。この点に関して、活動家の（集合的）認知の面――フレーミング、集合的アイデンティティ、現象学社会学や構築主義といった道具立てにより迫るのは、事態の解明に至る1つの方向性と考えられる。それに加えて、「在日特権」に信憑性を与えるコンテキストの解明も必要になる。後者については序論的な考察をすでに行っているため（樋口直人「東アジア地政学と外国人参政権」『社会志林』57巻4号、2011年）、前者について考察するのが筆者の次の課題となる。

（付記）本稿は科学研究費補助金による研究成果であり、稲葉奈々子、申琪榮、成元哲、高木竜輔、原田峻、松谷満の各氏との共同研究によっている。記して感謝したい。